

第8章 文革大転換後の中国を見る

大変転の年 —— 一九七六年

「迷信と思われるでしょうが、一九七六年は、年の始めからひどい黄塵に悩まされ、不吉な予感のする幕開けでした」親しい中国の記者の、こんな言葉が印象に残っている。実際、一九七六年は、一九四九年の中華人民共和国誕生以来の、歴史的な大変転の年だった。特に、周恩来首相と毛沢東主席の相次ぐ死去は、この二人の去就を焦点に「動乱の中国」を見つめてきた筆者にとって、まさに青天のへきれきに似た衝撃であった。

周恩来の死と天安門事件

この一連の意味は、時の動きとともに、じわじわと明らかにされていった。だが、ここでは、一九七六年に起こった重大な出来事を中心に、当時の筆者の心境を添えつつ、できるだけ忠実に再現しておきたい。

一月八日：周恩来首相が死去。享年七十八歳。翌九日早朝、中国共産党中央委員会、全国人民代表大会常務委員会、国務院（政府）が連合訃告を公表。テレビで見た弔問の光景では、老若男女を問わず、指導者や労働者、農民、兵士代表らが、周首相の遺体との対面で見せた涙と嗚咽の中に、彼の死の意味が鮮明に映し出されていた。同月十五日、人民大会堂で追悼会が開かれ、鄧小平筆頭副首相が弔辞を述べる。その遺骨は、遺言により台湾海峡を含む中国全土に撒かれた。

二月七日：中国政府は、華国鋒副首相（党中央政治局委員、第六副首相）の「首相代行」への就任を公表。同月三日の毛沢東主席の提案とされた。鄧小平氏でなければ、「上海グループ」（後の「四人組」）の一人、張春橋氏（党中央政治局常務委員、第二副首相）の昇任、といった大方の観測は見事に外れ、複雑な“政治闘争”を暗示。以来、鄧小平氏の話は断たれた。

四月五日：天安門事件（一般に「四・五運動」と呼ばれる）発生。同月四日の「清明節」（祖先の霊を慰める祭日）の数日前から、周恩来首相の死を悼む大衆が天安門広場に集い始め、四日には数十万人が人民英雄記念碑の周辺で、周首相の遺影を前に花輪を捧げ、詩を朗読する騒ぎとなる。これらの花輪を当局側が深夜に撤去したため、翌五日には激昂した大衆が警官や民兵と衝突、双方に多数の負傷者を出す惨事となった。

党中央政治局は、この騒動を計画的、組織的な反革命事件と断定、鄧小平氏が黒幕であると見なし、四月七日付で鄧氏を党内外の一切の職務から解任した（ただし党籍だけは留保）。同時に、華国鋒氏を党第一副主席と首相に任命する党中央の決議を公表した。これも毛主席の提起に基づくものだった。

鄧小平と江青の路線闘争

確か、天安門事件の直前だった。中国から対外人民友好協会の王炳南会長を団長とする代表団が来日、その歓迎会の席だった。北京特派員時代に、鄧小平氏の実力と活躍ぶりに直接触れていた私は、王会長に対し、当時最大のスローガンだった「闘私批修」（私と闘い、修正主義を批判する）を引き合いに出して、文革急進派だった「上海グループ」（江青、張春橋、王洪文、姚文元の各氏）側の「闘私」も必要ではないか、と話した。

そのころ、毛主席が時期を追って出していた「三つの指示」（簡略化すれば①階級闘争②安定団結③経済発展）をめぐって、七五年後半期から文革急進派の江青女史（毛沢東夫人）と、実務派の頂点にあった鄧小平氏の間を生じた激しい対立が暴露されていた。鄧氏は「この三項目の指示は今後一定期間、われわれの活動のカナメであり、どの一項目が欠けてもいけない」としていた。これに対し、江青女史らは、これを「業務の台風」「経済の台風」「資本主義の復活」と糾弾、「階級闘争こそカナメ」と主張。この段階ではすでに、文革急進派が優位に立っていた。

筆者の“不謹慎”な質問に、王炳南氏は、穏やかな表情は崩さなかったものの、黙ったまま答えなかった。ところが、この様子を見ていた中国大使館のある高官が、私に近寄って、「吉田先生、不要忘記四個字」（吉田さん、四つの文字を忘れないように）と言った。「四個字是甚麼？」（四つの文字とは？）と尋ねると、彼は「中日友好」と答えた。そこで私は「日中友好を思えばこそ率直に話したまでだ」と反論した。この人は当時、マスコミ関係では、一種の“生殺与奪”の権を持っていた。この一件以来、私は「上海グループ」つまり「四人組」が追放されるまで、中国大使館主催のパーティーの席には、一度も招待されることはなかった。他愛もない話だが、「政治の風」には、誠に過敏で厳しいものがあつた。

毛沢東の死と「四人組」逮捕

中国の災難はさらに続き、エスカレートしていった。

七月六日：毛主席とともに、人民解放軍創設の元老だった朱徳・全国人民代表大会常務委員長が死去。

同月二十八日：河北省の唐山地区を中心に大地震が発生。死者二十四万二千余人、負傷者十六万四千余人の大惨事となった。

九月九日：毛沢東主席が死去。一九二一年の中国共産党成立以来、波乱万丈の中国革命史の栄光と矛盾を一身に背負った巨人の、八十三歳の生涯であつた。党中央は「一カ月の喪に服する」と布告、毛主席の死を悼んだ。「偉大な舵取り」の死は、中国の最高首脳部ばかりでなく、広範な人民大衆の間に、大きな不安を抱かせた。全世界が、巨星亡き後の中国の行方を、固唾をのんで見守っていた。

十月六日：毛沢東死後、一カ月も経たぬこの日、文革急進派の「四人組」が突然、逮捕された。政権奪取のクーデターを計画し、そのために軍隊の一部を動員していた、というのが理由だった。翌七日、政治局は華国鋒氏を党中央主席と党中央軍事委員会主席に任命することを決議、党中央委全体会議の追認を求めることを明らかにした。

「大変動の続いた中で、『四人組』の追放だけは、大きな喜びであり、胸のつかえが取れた思いでした」一冒頭に挙げた中国の記者の感想である。当時、東京でデスクワークに就いていた私は、「来るべき事態が来た」と割に冷静な気持ちであつたことを覚えている。

“御墨付”の華国鋒政権誕生

周首相の死後、早くも二月には鄧小平氏や「四人組」を飛び越して、第六副首相から「首相代行」に抜擢された華国鋒氏。その彼は四月の天安門事件直後、党中央第一副主席、および首相に昇進、一挙に「ナンバー２」の地位に就いた。そして、「四人組」追放の翌日には、党中央主席と党中央軍事委主席に任命された。一年足らずの大変転の中で、党・政・軍の大権を一身に集める「毛沢東の後継者」となつたのである。

文革派である華国鋒氏が、イデオロギー的には同じ立場にあるはずの「四人組」を逮捕したことに、当時、意外の感を持つ者も少なくなかつた。だが、華氏は「四人組」とは、異なつた経歴と体験を持っていた。

彼は山西省出身だが、毛主席の生まれ故郷、湖南省で早くから活躍、文革当初の先鋭で複雑な路線闘争を克服して、湖南省で重要な地位を占めた。この功績と才腕を高く買われて党中央に引き上げられ、周首相の下で仕事に従事、七三年の第十回党大会では政治局委員となり、七五年一月の全国人民代表大会で副首相に任命された。

華国鋒氏を、「四人組」逮捕に踏み切らせたのは、葉劍英、李先念、聶榮臻といった故周恩来首相に近かつた党中央の指導者たちだつた。彼らは毛主席には従つたが、「四人組」とは一線を画していた。これに、毛沢東の警護責任者だつた汪東興氏や、軍隊内の文革擁護派と見られていた北京軍区司令官の陳錫聯氏らが加わつて、事態を決定的にした。

大転換の時期の緩衝材に

一九七六年を振り返ると、四つのことが想起される。①大黒柱だった毛主席と周首相の死去、②再び「最大の走資派」と批判され、党内外の一切の地位を解任されながらも、鄧小平氏の「党籍」が残されたこと、③文革急進派の「四人組」が、毛沢東の死後間もなく逮捕されたこと、④華国鋒氏が、毛主席の“御墨付”で頂点に立ったこと。

このうち、①と③は、再び帰らぬものとなり、②と④が残った。やがて②が蘇生して大きくなり、④を凌駕していった。そこには、晩年の毛沢東の権威と“御墨付”を背景にしつつ、それを「金科玉条」として政権掌握に臨んだ華国鋒氏と、百戦錬磨の自らの力に頼みつつ、毛沢東思想の核心にあった「实事求是」（事実に基づいて真理を求める）を巧みに活かして采配を振るった鄧小平氏との「実力の差」があった。

ただ、一つだけ述べておきたいことがある。それは、華国鋒氏の存在が、毛沢東時代が終わり、鄧小平時代が到来する過渡期に、なくてはならぬ“緩衝材”だった、ということだ。それは、ソ連でスターリン時代からフルシチョフ時代に移行する幕間に、若いマレンコフ政権が誕生したケースに似ている。

時代の大転換をもたらすワンポイント・リリーフではあったが、それなしには新時代の到来がスムーズに実現しにくい歴史の現実があった、と思っている。

文化大革命とは何だったのか

中国のことでは、書き留めておきたいことが後を絶たない。だが、この辺りで、一九六六年半ばから十年間に及んだ「プロレタリア文化大革命」とは何だったのか、について少しばかり触れておこう。ここにしたためるのは、私自身が理解し、感じ取っていった文化大革命であり、この間、報道に携わった一人の記者としての反省を込めた弁明でもある。

文革当初は驚きと感動

正直に言って、筆者は、巨大な中国の頂点にあった毛沢東の発動した文化大革命に、大きな驚きとともに、ある種の感動を覚えた記者の一人である。

その当初、中国の長い革命と建設の中で、互いに補完し合ってきた毛沢東（党中央主席）と劉少奇（党中央筆頭副主席・国家主席）の間に、大きな亀裂が生じたことを知ったとき、果たして中国はどうなるのか、という危慎の念を抱いたのは確かであった。だが、厳しい中ソ対立の中で、中国が社会主義の道を歩み続けるなら、この国を底辺から支える労働者、農民、兵士といった人民大衆が、本当の主人公にならなければなるまい、という気持ちの方が、より強く働いていた。

そして、ウンカのような「紅衛兵」の大群が、毛沢東の呼びかけに応じて立ち上がった姿を目の当たりにしつつ、中国が社会主義の変質を防ぎ、古い思想、文化、風俗、習慣を一掃し、官僚主義の弊害を打破するためには、下から上への突き上げが起こるのもやむを得ないことであろう、と感じていたのである。当時、党中央の実務を掌握し、組織運営の頂点にいたのが、劉少奇その人であった。党の機構は上級機関から下級機関に至るまで、彼の大きな影響下にあった。

この思いは、文革発動後ほぼ一年を経た六七年六月、文革の執行機関と言われた国務院（政府）の周恩来（首相）の次のような発一言で、一層深まっていった。

「文化大革命には思想闘争、奪権闘争、革命の後継者養成といった三つの目的があり、絶対多数の人民大衆、人民解放軍、大多数の幹部に依拠している。この三つの目的をつなぐ赤い糸は、毛沢東思想だ」

これは、周恩来が北京訪問中の日本科学機器展覧会代表団に語った言葉である。彼は続いて、「建国以来十七年、政権は共産党の指導する人民が握り、経済は社会主義体制に改善されたが、頭の中の古い思想は残っている。これを改造しないと、政権も経済的基礎も変質する危険がある」と説明していた。

悔いが残る暗部の報道

しかし、盾に両面があるように、文革の実際の動きにも暗い側面がいくつもあった。

その一例が、人間をその出身によって固定的にとらえる「紅五類」「黒五類」という分類の仕方だった。「紅五類」は労働者、農民、兵士、革命幹部、革命烈士を指し、文革の推進役となった「紅衛兵」の大半が、彼らの子弟から選抜された。逆に「黒五類」は地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子に貼られたレッテルであり、常に批判粛清の対象とされ、その影響は彼らの子弟から“一族郎党”にまで及んだ。

下積みに置かれてきた「紅五類」の発言権が増大するのは、それなりに理解できる。しかし、出身階級を子や孫の代まで適用してしまう姿勢は、科学的な社会主義とは言えず、根深い封建的な“天命論”に通じるものでもあった。しかも時が経つにつれて、その弊害は増大していった。文革急進派の「四人組」は、民主派や知識階級、さらには自陣営にいた者までも敵に回し、タケノコの皮をはがすように、周囲から有能な人材を遠ざけていった。

毛沢東の威を借りて、権力の中樞に接近した「四人組」は、政治的なプロパガンダには長けていたが、これを現実にかす能力はなかった。観念的な理論ばかりが先鋭化して、広範な幹部や大衆からも遊離し始め、それをゴリ押しするためにファッション化した。彼らの主張は、階級闘争推進の一点張りで、実際の生産は停滞し続けた。かつては、どんな大動乱の際にも、打撃面の総和を押さえつつ難局を采配し、打開してきた毛沢東自身も、もはや「四人組」をコントロールする力を、ほとんど失っていた。だが、こうした内実を、的確にとらえた報道を、十分になし得ただろうか。省みて苦い思いが残る。

「窮則変、変則通」

中国古来のことわざに「窮則変、変則通」（窮すれば変化が起きる。変化が生じるから通じる）というのがある。一九七六年は、まさに文革路線が「窮した」年であった。何よりも、周恩来に続く毛沢東の死、そして「四人組」の打倒は、それを如実に示していた。

「你辦事、我就放心」（君がやれば、私は安心だ）—毛沢東のこんな遺言で、華国鋒が、その後継者となった。彼は「四人組」の逮捕には踏み切ったが、同時に毛沢東の忠実な継承者であることを宣伝しようと努めた。そのため、「プロレタリア独裁の下での継続革命」という文革の理念を引き続き掲げるとともに、いわゆる「二つのすべて」を提唱した。すなわち、「毛主席の決定したことは断固として守らなければならない、毛沢東の下した指示はすべて変わることなく守らなければならない」という姿勢で政局運営に臨んだ。ここに、華国鋒の大きな限界があった。

変化を求める時代の要請は、やがて党内外のすべての職務を解任されながらも「党籍」だけは保持していた鄧小平の復活を実現し、それが「変則通」、つまり新しい時代の到来へと道を開いた。その決定的な措置が、一九七八年十二月の第十一期中共中央第三回総会での、文革路線の大転換につながる「天安門事件の逆転評価」であった。同総会では、今後の最大任務を「四つの近代化」（農業、工業、国防、科学技術）に移す、という重大決定を下し、イデオロギー最優先の文革時代とは全く異なった道を歩み始めた。

その底流には、嵐のような階級闘争の時代は過ぎ去った、という認識が強く働いていた。そして「生産関係を変革すれば生産力は増大する」といった文革時代の発想を大きく転換し、最大の問題点を「進んだ生産関係と遅れた生産力の間の矛盾」として、生産力向上を最優先課題とするに至った。

反省から経済建設へ

これは、文化大革命を発動し、最初は林彪、次いで「四人組」によって極端にまで神格化された毛沢東への、大きな見直しを迫る動きともなった。中国内部には、文革時代を「十年の災害期」とし、毛沢東自身の文革期の指導上の誤りとして、①階級闘争を拡大し左傾

偏向の政策をとったこと、②自己を党の上に置き、「個人崇拜」を助長させた点、などを指摘する者も出てきた。新しい指導部が、階級闘争よりも政治的な安定団結を求めつつ、「四つの近代化」、特に経済建設に全力を挙げているのは、この深刻な教訓を汲み取っているからであろう。

端的に言って、一人当たりの国民所得が、年間二百ドル前後という実情を見れば、中国にとって、とにかくパイを大きくすることが緊急課題であることは十分に理解できる。農村における自留地や自由市場の活用の奨励、企業における自主権拡大の全国的な適用、外資導入や先進的な経営管理の吸収、外国との合弁企業の設置への積極的な施策、といった経済的措置の中に新指向が表れている。そればかりでない。一家族に子供は一人という人口抑制策や、結婚年齢の引き上げをうたった婚姻法の制定などにも、十億人の近代化への真剣な模索がうかがえる。

絶えず複眼忘れまい

しかし、新しい指導部の前途には、まだ数多くの試練が待ち受けている。その中でも最も重要なことは、自らの内部に潜む新たな特権化と官僚主義の克服であろう。文革時代の極左路線と同時に、封建的官僚主義を糾弾した首脳陣の中に、相変わらずその地位を利用して、自分の親子、兄弟、親族の便宜を優先的に図る風潮が絶えない点である。進学、就職、さらには外国留学といった面にもそれは目立っており、「機会を均等にすべきだ」という声は少なくない。

また、高級幹部の子弟の犯罪には、なお手加減が加えられている、という報道も出ている。「有権就有一切」（権力さえあれば、すべてがある）という度し難い旧来の習慣が、文革時代に引き続き、「四つの近代化」を目指す今日にも根強く横行している、と言わざるを得ない。

さまざまな動機があったにせよ、文化大革命の発動が、あれほどの若者を引きつけた背後には、中国に根強い官僚主義への批判があったからではなかろうか。しかも、こうした風潮に真剣な反省が加えられず、経済近代化の側面だけが進行するならば、いびつな格差構造の拡大は避けられまい。

大きく揺れてきた中国の動きを追いながら、厳しい反省を込めて思うのは、月並みな表現だが、絶えず複眼の視点を忘れてはならぬということだ。もとより、隣国の人々の苦悩と努力は「温かい心」で見守らなければならない。だが、その中にいつも「冷静な頭脳」を持っていたい。

「自問自答」し始めた中国

文革路線を大転換して、近代化路線へ踏み出した中国。その画期的出発点となった、一九七八年十二月の第十一期中共中央第三回総会（十一期三中全会）から一年近く経った七九年の秋、三週間にわたって中国を訪れる機会があった。建国三十周年を迎えた直後で、私にとっては、文革当初、文革の後半期に続く、三度目の訪中であった。

実力者・鄧小平氏と会見

それは一朝日新聞社が、中国を代表する新聞『人民日報』の招待を受け、文革後初の取材代表団を派遣したときのことで、当時の渡辺誠毅社長を団長に、政治、経済、外報、社会、科学、写真と一分野の異なる記者を集めた計九人で編成され、筆者は滞中三年の特派員経験者ということで、秘書長役を務めた。

北京を訪れて間もない十月十八日、実力者・鄧小平副首相が人民大会堂で、われわれ訪中記者団の全員と会見、正味二時間にわたり、中国の直面する内外の諸問題について、率直な見解を披歴してくれた。また、日中言論界のトップ会談とも言える、朝日新聞社社長と人民日報の最高責任者、胡績偉総編集との膝を交えた対談も行われた。

訪問地は、北京、上海のほか浙江、広東、湖南、広西、陝西、四川各省に及んだ。報告は、『朝日新聞』紙上に三十回にわたって連載されたが、中国が大きく衣替えしつつある最中に行われた取材ただけに、大きな反響を呼んだ。その後、各記者が新項目を追加、加筆し、『十億人の近代化』と題して、一冊の本にまとめられた。

往時を振り返りつつ、ここには筆者の目と心に映った、中国の移り変わりの断面をお伝えしておこう。

本屋に現れた世相の変化

本屋は世相を敏感に反映する、と言われる。この旅でも、それをはっきりと感ずることができた。

北京の王府井にある有名な新華書店をのぞいて驚いたのは、本の種類がとても豊富になったことだった。「四つの近代化」という文革後の至上命題を反映してか、農業、工業、科学技術、それに語学に関する書物が氾濫していた。歴史物や長編小説の類いも目についた。また、バッハ、モーツァルト、ベートーベン、リストー「四人組」時代には“ご法度”とされた西洋の古典音楽の楽譜まで、ずらりと並んでいた。

大勢の人々が出入りする中で、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン、毛沢東の著作などが並べられた書棚の前に、人影がほとんどないのを見たとき、二つの情景が反射的によみがえった。一つは、文革初期の一九六六年秋、孫文生誕百周年記念式典に参加するため、初めて訪中したときの本屋だった。あのときは、どこでも真っ赤なビニールのカバーをかぶった『毛主席語録』一色だった。

もう一つは、北京特派員時代（一九七二～七五年）の本屋の風景だ。この時期は、中国が再び外へ目を向け出した時期であると同時に、なお「四人組」が文芸界を牛耳っていたころだった。それだけに、本の種類も、文革初期よりは増えていたが、やはり単調であった。この時期を象徴するものと言えば、孔子批判を中心とする「儒法闘争史」を取り扱った書物だった。こんな文革時代に比べれば、三度目の今回は、まさに隔世の感があった。

マンガ「風刺とユーモア」

とても新鮮に映ったのは、人民日報が『諷刺与幽默』（風刺とユーモア）という漫画増刊号を出版していたことだった。この年の春から毎月一回発行され出した、四ページ建てカラー刷りの新聞。部数は五十万だが、毎回発売と同時に、あっという間に売り切れてしまうそうだ。確かに、そこには、中国人が、自分たちの内部に潜む欠点を、自問自答するさまが、鮮やかに描かれていた。「鉄飯碗」（鉄のおわん）も、傑作の一つ。

「鉄のおわんは 金には換えられぬ いったん手に入ると 飢えや寒さの愁いなく ちゃんと三度のおまんまは食べられる だらだら仕事をして 悶着を起こしても 仮病を使っても 労働模範も怠け者も一みんな同じだ 一緒に大鍋の飯を食らい ごはんがなくなったら おかゆをすすり 社会主義を食いつぶしてしまうのが落ちさ」

「鉄飯碗」とは、落としても割れないおわんのことで、食いはぐれのない職業の意味。日本流に言えば「親方日の丸」の企業で働く身分、といったところだ。

「春風帆影」という漫画は、公用で出張したお役所の幹部らが、物見遊山に興じる光景を描いたもの。また、中央からの農業への投資が省、地区、県、人民公社の各段階で費消され、末端の農民には“雀の涙”ほどしか届かぬ状況をなじったものもある。「看風駛船」は、人物を帆掛け船になぞらえて、東風が吹いても賛成、西風が吹いても賛成、といった“風派”（風見鶏）を描いている。

「頑症七例」もユーモアたっぷりだ。上層部にペコペコするなど、度し難い“七つの症状”を列挙している。その中には、お辞儀ばかりして腰の曲がった“エビ症”の人間や、“朝天眼”といって、目が天井ばかり向いた人物もいる。一方の意見ばかり聞いて他の意見には耳を貸さぬために、片方の耳が極端に肥大化し、他方の耳が縮んだ漫画も登場する。

漫画増刊号に現れたもう一つの特徴は、幹部がいったん権力の座に就くと、簡単に官僚

化し、特権階層に墮してしまう点だ。これは旅先で聞いた「中国のガンは封建的官僚主義です」という話と一致していた。

明治維新に目を向ける要人

「明治維新は、日本の近代化の重要な出発点だった」「笑われるかもしれぬが、明治天皇の“五箇条の御誓文”がとても新鮮に感じられます」—この取材で幾度か、明治維新について語る中国の人々に出会った。いまさらと思いつつ、ふと『毛沢東選集』の「人民民主主義独裁について」を思い浮かべた。

「一八四〇年のアヘン戦争に敗れたときから、中国の先進的な人々は、非常な苦勞を重ねて、西方諸国に真理を求めた」

こんな書き出しで始まる一節は、洪秀全、康有為、嚴復、孫中山らの名を挙げ、当時の知識人たちが実に八十年近くの間、資本主義諸国に学んだ歴史を、簡潔にしたためてある。西方の新知識に関する書物の読破、数多くの留學生の派遣、科挙（封建王朝時代に行われた官吏登用試験の制度）の廃止と、洋式の学校の設立—。「国を救うには維新を行うほかなく、維新を行うには外国に学ぶほかない」というわけである。

「日本人は西方から学んで効果を収めていたので、中国人も日本人から学ぼうと考えた」—論文は、こうなふうに続いている。だが、八十年に及ぶ努力は、実を結ばずに終わりを告げた。中国が常に「先生」と仰いだ資本主義諸国が、いつも「生徒」である中国を侵略し続けたからであった。その後、ロシアの十月革命（一九一七年）に啓示を受けた中国は、一九一九年の「五・四運動」などを通じて、半植民地、半封建社会の状態から、資本主義の道を通らずに、救国の方途を社会主義に求めていった。

それから半世紀余の今日、世界は大きく変わった。同じ社会主義の道を歩んだはずの中ソ間の亀裂が増大する一方、西側の対中封じ込め政策は次第に接近政策へと転じていった。その中で、中国は再び先進資本主義諸国に学ぼうとする姿勢を復活させ始めた。

ある中国の要人は「国家の要請もあり、明治維新の研究をやり始めたところです」と言った。そして、「広く會議を興し万機公論に決すべし」「旧来の陋習を破り天地の公道に基づくべし」—と、「五箇条の御誓文」のいくつかを口ずさんだ。日本の最高学府で法律を学んだこの老先輩は、祖国で大きな問題となりだした「民主と法制」について、日本の近代化の原点を見直そうとしていた。

再び、資本主義に学ぶ

帰国後、教科書を調べてみたら、「明治天皇と新しい政治」について、日本では小学校六年の社会科で習い始めていることを知った。そこには「五箇条の御誓文」の文語調の表現が、こんなふうに、口語体に意識されていた。

- 一、大事な政治については、大勢で會議を開き、議論して決めよう。
- 一、身分の高い人も、低い人も、力を合わせて仕事にはげよう。
- 一、国民みんなが、満足のあるような政治をしよう。
- 一、いままでの悪い習わしにとらわれず、正しい道理にしたがって、ものごとを行おう。
- 一、世界の国々の良いところを取り入れ、国家の基礎を強くしよう。

しごく、当然のことばかりだが、この中には新生日本が、過去の封建時代と決別し、近代化への道を歩み出した政治的、思想的な原点がはっきりと読み取れる。

しかし、わが国と違って、数千年来の封建的な伝統と文化の重みを、自らの深層部に持ち続けたのが中国である。しかも、社会主義の道を歩み出したとはいえ、意識形態に、なお根強く封建時代の残滓を拭い得ずにいる、巨大な隣国の人々にとって、それはある種の新鮮さを呼び起こすに足る言葉なのかもしれぬ。

中国が半植民地、半封建社会の状態から、資本主義の道を通らずに、社会主義社会へと移行していったこと—この道は、資本主義諸国の中国侵略という長い歴史的事実を見つめるとき、避けることのできぬ選択だったと言える。

しかし、中国が拒否した資本主義社会は、なお力強く生き延び、しかもさまざまな分野で社会主義諸国よりも優れた側面を持っている点も否定できない。厳しい競争原理、技術革新、システム管理、個人能力の発揮、さらには各種の手続きや法律の整備など、人類社会の発展の上で「共通の財産」になるべきものも内包されている。

ここに、中国が再び、進んだ西側の資本主義諸国に学ぼうとする「螺旋状の回帰」の意味を見出すことができるような気がした。

華南に「経済特区」出現へ

「資本主義の優れた面に学ぼう」とする姿勢は、地方にも浸透しつつあった。特に、香港や台湾に近く、海外華僑との往来も多い華南の広州を訪れたとき、それを強く感じた。ここで、広東省革命委員会（省の政府）の招宴があった夜、同省の副省長で対外経済工作委主任、同計画委主任を兼ねる曾定石さんは、「広東省は近代化路線の中で特別な任務を与えられている」と述べ、耳新しい「経済特区」の話をしてくれた。

近代化を進めるには、すべてが中央に高度に集中し過ぎている旧来の状態を改め、地方の自主権を拡大し、市場経済を導入する必要がある。こうした見地から、他地区より対外経済活動で有利な条件を持つ広東省が、台湾の対岸に位置する福建省とともに、特別な経済活動を認められることになった。

広東省では、香港に隣接する深圳を「経済特区」とし、華僑資本はもちろん、日本や欧米諸国からの投資も歓迎し、できれば合弁企業も設立する。また利潤の運用についても、大幅な自主権を与えられている。近代化にとっては、大きな試金石となるものだ。

こんな話をしてくれた曾さんは、当面の緊急課題は対外経済活動をいかに着実に軌道に乗せていくかにある、と強調した。同時に、香港や台湾、それに諸外国との経済・貿易活動が順調に進むようになれば、それが将来の祖国の統一にもつながる、という展望も持っていた。

ともあれ、三度目の中国には、文革時代とは大きく様変わりした理念と現実が、動き始めていた。